

子育て支援を通した学生の学びに関する研究

三輪聖子、木澤光子

岐阜女子大学生活科学科生活科学専攻

(2013年9月19日受理)

Student Learning Acquired through Child Care is Provided in Parenting Support

Department of Home and Life Science, Major in Home and Life Science,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gife, Japan (〒501-2592)

MIWA Satoko, KIZAWA Mitsuko

(Received September 19. 2013)

要旨

子育て支援活動は、地域の子育て支援という目的だけでなく支援活動に携わる学生にとっても重要な学びとなっている。特に将来家庭科教員をめざそうとしている学生にとって乳幼児の世話を直接担当できる保育体験のメリットは大きい。この体験がどの程度学生の学びにつながっているか、そこから何を学んでいるのかを明らかにし、直接体験することの重要性を明確にする。結果、子どもと親に接する回数が増加するほど子どもに対する理解度は高くなり、関心度の高い人の方が、理解度は増していくことがわかった。また託児の経験回数が多くなるほど、抱き方などの技術が高まることが明らかになった。

〈キーワード〉 子育て支援 家庭科教育 保育体験 保育実習 託児

1. はじめに

岐阜女子大学生活科学専攻では、子育て支援活動を2005年から実施し、今年で9年目を迎える毎年支援内容を改善しながら拡大している。今年度は「ママパパアゴラ」として①ベビーマッサージ②キッズタッチ③らくちんこども食④クラフト村の4活動を実施している。本子育て支援活動実施の目的は、地域の子育て支援であるが、支援活動に携わる本学学生にとっても重要な学びとなっている。特に将来家庭科教員をめざそうとしている学

生にとって親と乳幼児の触れ合いや親からの話、乳幼児の世話を直接担当できるメリットは大きい。

現在中学校や高等学校の家庭科教育の保育領域における保育実習の重要性は増しており、それを指導する子育て経験のない教員にとっては貴重な体験となる。

そこで本研究では、実際の体験がどの程度学生の学びにつながっているか、何を学んでいるのかを明らかにし、直接体験することの重要性を明確にすることを目的とする。

2. 方法

(1) 調査対象・方法

調査対象者は、本学生活科学専攻2010年度4年生16人、2011年度4年生17人、2012年度4年生13人、2013年度生活科学専攻4年生7人、初等教育学専攻4年生4人の合計57人である。

調査方法は、2010年度4年生は支援活動がすべて終了した後、アンケート調査を自記式質問紙法で実施した。2011年度4年生と2012年度・2013年度4年生は子育て支援のベビーマッサージ、キッズタッチ、らくちん離乳食・こども食、ママ・パパサロンの託児が1回終了するごとに、アンケート調査を実施し、さらに印象に残ったことや学んだことを自由記述で尋ねた。

(2) 分析方法

託児に関しては、託児回数と子どもに関する12項目（「心地よい抱き方」「個性の把握」「泣く・ぐずる内面の理解」「生活リズムの理解（おむつ交換）」「生活リズムの理解（睡眠）」「安心感のある環境づくり」「運動発達の実際」「ことばのやりとり」「手先の器用さ、身体全体の動きの観察」「遊びにかかわる（音・歌）」「遊びにかかわる（ままごと・玩具）」）の理解度とをクロス集計し、子どもと触れ合う頻度と理解度の関係を分析した。

ベビーマッサージ・キッズタッチに関しては、ベビーマッサージ・キッズタッチへの関心度と子どもに関することやベビーマッサージの効果について13項目（「コミュニケーションの取り方」「人見知り、後追い」「月齢と成長過程」「首のすわり」「寝返り」「お座り、はいはい、立つ」「泣き声や表と親の対応」「抱き方」「おむつの替え方」「飲み物を与える」「夜泣き、ストレス発散」「情緒安定効

果」「身体的健康的効果」）の理解度、さらに参加意識をクロス集計し、ベビーマッサージ・キッズタッチへの関心度と理解度・参加意識の関係を分析した。集計・分析はSPSS13を使用した。

3. 結果と考察

(1) 託児回数、ベビーマッサージ・キッズタッチ参加回数と子どもに対する理解度

託児回数、ベビーマッサージ・キッズタッチ参加回数と子どもや親子関係の理解に関する状況を明らかにした。つまり子どもとかかわる回数が増えるほど子ども理解は深まるのではないかと考えた。結果は、 χ^2 検定により有意差が認められたものだけをあげる。

図1は託児回数と泣く・ぐずるの内面理解についてである。1回の場合「ほとんど理解できない」が20.8%と最も高く2回目以降は急激に減少する。さらに4回になると「とてもよく理解できる」割合が66.7%と非常に高くなっている。託児は母親から離れる子どもが大泣きをする場面が非常に多くみられ泣く子どもの様子がとてもよく感じられるのでこのような結果になったのではないかと考えられる。

図2おむつ替えは、自分でおむつを替えた学生は理解できるが、そのような機会に恵まれなかった学生は経験することができなかつたので理解できないと答えている。回数が増

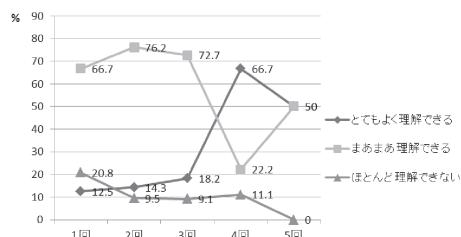


図1 泣く・ぐずる（託児） $P < 0.05$

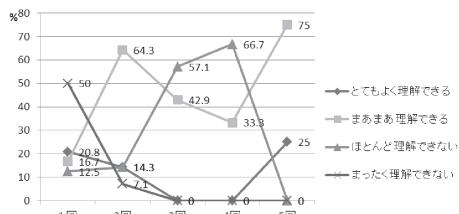


図2 おむつを替えること（託児） P<0.05

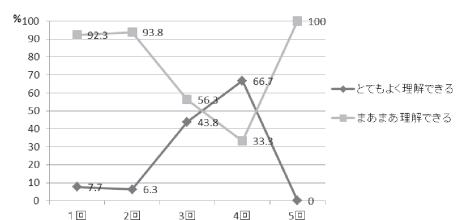


図3 コミュニケーションの取り方（ベビマ） P<0.05

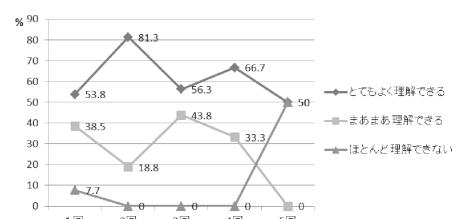


図4 泣き声や表情と親の対応（ベビマ） P<0.05

えれば機会も増加すると考えられるが一概には言えない。有意差は認められるので回数と理解度に関係性はある。

託児に関する他の項目については有意差が認められなかった。しかし他の項目も回数が増加するごとに理解度は高まる傾向にあると言える。

図3はベビーマッサージ・キッズタッチ参加回数と乳幼児とのコミュニケーションの取り方の理解度における関係性を示した。理解できない学生はおらず、すべてが理解できると答えている。5回を除き回数を重ねるごとに「とてもよく理解できる」割合が増加している。

図4はベビーマッサージ・キッズタッチ参加回数と泣き声・表情と親の対応の理解度における関係性を示した。ほとんどの学生が理解できると回答しており「とてもよく理解できる」は2回が最も高くなっている。ばらつきはみられるものの回数と理解度の相関はみられる。

その他の項目も有意差は認められないものの回数と理解度は正の関係性がみられる。

以上の結果から、託児やベビーマッサージ・キッズタッチの回数が増加するにつれて理解度は高くなることが明らかになった。3年間の積み重ねの結果であるため年度ごとの学生の意識や個人的感情などが影響していることも考えられる。しかし、概ね経験回数と理解度は正の相関があると考えられる。

(2) ベビーマッサージ・キッズタッチへの関心度と子ども・親への理解度

ベビーマッサージは、母親が1歳未満の乳児に対してベビーマッサージをおこなう横に寄り添って、学生も赤ちゃん人形を使用し一緒にベビーマッサージをおこなう活動である。またキッズタッチは1歳以上の幼児に対する親子の身体接觸である。乳幼児の様子や母親の言葉かけなど、親子のかかわりを観察し母親に対して質問などもおこなうことができる。ベビーマッサージ・キッズタッチ終了後、抱っこさせてもらったりおむつ換えを観察し子どもと触れ合ったりする。また学生が絵本の読み聞かせも実施している。参加終了後、アンケート調査を実施した。

ベビーマッサージ・キッズタッチに対する学生の関心度（「非常に高い」「やや高い」「やや低い」「非常に低い」）を4段階で尋ねた結果と子ども・親に対する理解度（13項目）と学生の参加意識をクロス集計した。関心度は、すべての学生が「非常に高い」と「やや

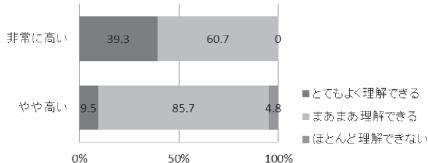


図5 コミュニケーションの取り方
P<0.05

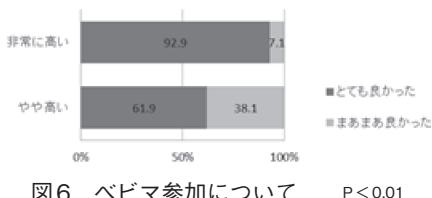


図6 ベビマ参加について P<0.01

高い」で占められており、「低い」と答えた学生はいなかった。そのうち χ^2 検定の結果、有意差が認められたものをあげた。

図5は子どものコミュニケーションの取り方の理解度における関係性を示した。関心が「非常に高い」と答えた学生は「とてもよく理解できる」割合が39.3%と「やや高い」9.5%の学生と比べて理解度がかなり高くなっている。関心の高い学生は直接母親と子どものかかわりを深く観察していると考えられる。

他の項目は有意差が認められなかった。

図6は関心度とベビーマッサージ・キッズタッチに参加してよかったかとの関係性を示した。「非常に関心が高い」学生は「とてもよかった」92.9%と非常に割合が高くなっている。学生が乳幼児と母親のかかわりを直接みられる機会は少ないため参加してよかったという気持ちが高くなるのは当然なのかもしれない。

以上の結果から、ベビーマッサージ・キッズタッチへの関心度と子ども・親に対する理解度は、程度の差はあるものの、ほとどの項目も関心度の高い人の方が、理解度は増して

いくことがわかった。特に、目前で観察できる親子の様子や乳幼児の様子は特に理解度が高くなっていた。

(3) 自由記述の内容分類からみた意識と学び

①ベビーマッサージ・キッズタッチ参加による印象に残ったことや学びについて

記述内容を表1のように分類した。「乳幼児の特徴についての気づき」12項目（心情、行動・態度、身体、言葉、母親関係、人間関係、環境とのかかわり、認知、生活習慣、個人差、男女差、その他）、「情動的経験」9項目（子どもがかわいい、安心感、かかわり—嬉しい、かかわり—驚き、かかわり一大変さ、かかわり—接し方・工夫、かかわり-嬉しい・大変混在、体験してどう思うか、その他）、「体験行動」3項目（抱く、座らせる、その他）、「体験による学び」7項目（親子の関係性、コミュニケーション・対応の取り方、発達、遊び、抱き方、おむつ交換・服の着脱、その他）、「母の様子」1項目の全32項目に分類した。なお、この分類は砂上らによる研究の分類を参考とした。

表1に示す79人は延べ人数であり、一人の学生が複数回参加している。

結果は次のようであった。最も回答の多かった項目は「乳幼児の特徴についての気づき」の〈行動・態度〉44である。次に〈母親関係〉25、〈体験による学び〉の〈その他〉25である。全体として「乳幼児の特徴についての気づき」に関する項目が多い。年度によって記述内容の傾向が異なることもわかる。2013年度は「体験による学び」の〈その他〉が多く、具体的には「母親と話すことができてよかった」「母親同士の情報交換」「親の考え方の違いを知った」など子どもに関することだけでなく母親の考え方や行動などに関心を示していることがわかる。

表1 ベビーマッサージ・キッズタッチの内容分類

注: ○の横にある数字は○の数を示す

表2 託児の内容分類

ベビーマッサージ・キッズタッチを通して
学生は、母親と乳児のかかわりから多くのこ
とを学ぶことができたと考えられる。乳児の
心情や行動が母親によってどのように変わる
のかということ、体験することにより教科書
で学んだことをリアルに受け止めることができ
たこと、乳児の行動は一つ一つ意味がある
ということ、同じ月齢でも発達が異なるこ

と、母親そのものの考え方や行動などを具体的に学ぶことができたことなどがわかった。
②託児による印象に残ったことや学びについて

記述内容を表2のように分類した。ベビーマッサージ・キッズタッチとほとんど項目は同様であるが「体験行動」6項目（抱く、おむつ交換、遊ぶ、散歩、授乳・水分補給、そ

の他)とし、母親と分離し直接、乳幼児とかかわるため行動内容を増やした。全34項目に分類した。表2に示す56人も延べ人数である。

結果は次のようにあった。最も多い項目はベビーマッサージ・キッズタッチ同様「乳幼児の特徴についての気づき」の〈行動・態度〉29である。次に「体験による学び」〈子どもの行動〉17であり、3番目は「情動的経験」〈かかわり—接し方・工夫〉・「体験による学び」〈コミュニケーション対応の取り方〉16である。これらも年度によって記述内容に特徴があり、2011年度は「情動的経験」〈かかわり—接し方・工夫〉が非常に多くなっている。「体験行動」の〈抱く〉〈遊ぶ〉〈散歩〉はほとんどの学生が体験しているはずであるが、記述には特にあげられていない人もあった。託児の当り前の行動として受け止め、記述していないのかもしれない。

「体験による学び」では〈親子の関係性〉と〈コミュニケーションの対応〉〈子どもの行動〉を学んだと記述している人が多い。これらは、「乳幼児の特徴についての気づき」や「情動的体験」、「体験行動」で気づいたり体験したりしたことがすべて学びにつながっていると考えられる。

託児では、2時間ほどの間、泣く乳幼児を抱きかかえ、あやしたり外へ散歩に連れて行ったり、絵本を読んだり、ボールやままごとなど玩具で遊ばせたりと学生生活の日常では考えられない体験をした。そして母親の顔を見た瞬間の乳幼児の表情から様々な思いを学んだ。早く母親が来ないかなと思いながらの2時間は、学生にとって非常に長く感じられたようだ。これらの行動体験や情動的経験から、「教科書で書かれていたことが実感できた」と記述していた学生がいたが、大学で学んだ知識が直接学生に実体験として結びつ

いたと言える。さらに、実体験から乳幼児に対する世話の技術も高まったと考えられる。

4.まとめ

以上のことからベビーマッサージ参加、託児経験を通して学生が学んだ乳幼児や母子関係に対する意識、乳幼児に対するかかわり方の技術などについて以下のことが明らかになった。

- ・託児やベビーマッサージ・キッズタッチの回数が増加するにつれて子どもに対する理解度は高くなった。
- ・ベビーマッサージ・キッズタッチへの関心度と子ども・親に対する理解度は、程度の差はあるものの、関心度の高い人の方が、理解度は増していくことがわかった。
- ・託児の経験回数が多くなるほど、抱き方などの技術が高まった。
- ・ベビーマッサージ・キッズタッチを通して、乳幼児の心情や行動が母親のかかわりによって変わることを体験的に理解した。
- ・託児を通して、泣いている乳幼児のあやし方、遊び、散歩などの技術を理解した。
- ・乳幼児の心情を理解した。
- ・乳幼児の発達の個人差について理解した。
- ・教科書で学んだ知識が実践でき、身に付いた。

年度を重ね、データを蓄積することにより、学生自身が持っているパーソナリティが学びに影響していることもわかってきた。今後、家庭科教員をめざす学生に家庭科教育の保育領域に活かせる経験を積ませ、学生の知識と技術向上につなげたい。

参考文献

- 1) 三輪聖子, 木澤光子「子育て支援の託児・

- ベビーマッサージを通して得た学生の学び
(第2報)」『岐阜女子大学紀要』42, 2013
- 2) 三輪聖子, 木澤光子, 梶浦恭子, 馬渕知子
「子育て支援の託児・ベビーマッサージを
を通して得た学生の学び」『岐阜女子大学紀
要』41, 2012
- 3) 伊藤葉子「中・高校生の家庭科の保育体験
学習の教育的課題に関する検討」『日本家
庭科教育学会誌』58(6), 2007
- 4) 砂上史子, 日景弥生, 仲嶋明子, 盛玲子「高
校家庭科における保育体験学習者の意識変
容 (第2報) 一生徒の感想文に見る保育体
験学習者の経験内容の分析—」『日本家庭
科教育学会誌』48(1), 2005
- 5) 砂上史子, 日景弥生, 仲嶋明子, 盛玲子「高
校家庭科における保育体験学習者の意識変
容 (第1報) —保育体験学習者の意識変容
過程の構図化」『日本家庭科教育学会誌』
46(4), 2004)